

世の中はかくこそありけれ花盛り山風吹きて春雨ぞ降る

頓阿

頓阿の家集『続草庵和歌集』「春」の一首。

頓阿ってだれ？と思う人も多いだろうが、彼こそ鎌倉から南北朝を経て室町に至る時代の、二条派和歌を支えた人物であった。二条派とは、藤原定家の子孫にあたる和歌の三派（二条派・京極派・冷泉派）のうちの、本家である。二十代前半に出家して、以後、歌僧としての道をまっしぐら。歌の実力に加えて、社交性も兼ね備えた人であったという。孤高の人・西行、数奇の人・能因などを思い浮かべると、歌僧にもいろいろなタイプがあったのだなあとと思う。「とんあ」という法名のひびきも、親しみ深い。

さてこの歌、頓阿が企画した『句題百首』の一首である。「句題」とは、漢詩句を題とする題詠。

「世の中とはこういうものなのだなあ。花盛りになれば山風が吹き、春雨が降って花を散らせるのだ」。



この歌の題は「花発イテ風雨多シ」。晩唐の詩人・于武陵の五言絶句「勸酒」より。「黄金の杯いっぱい注がれたこの酒を君は断つてはいけない」という前半に続く後半の詩句「花発イテ風雨多シ／人生別離足ル」である。そこで思い出す井伏鱒二の名訳。

コノサカヅキヲ受ケテクレ ドウゾナミナミツガシテオ  
クレ／ハナニアラシノタトヘモアルゾ 「サヨナラ」ダ  
ケガ人生ダ (『厄除け詩集』)

頓阿の歌の第三句以下がこの「句題」にあたるところだ。そして初句・第二句は『古今集』の一首からの引用。

世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も恋し  
かりけり 紀貫之

噂に聞くばかりで逢えない人への思いを詠んだ恋の歌。この歌の「世の中」(男女の仲)を、人生という「世の中」に転換した。通底するのは、いずれも思うようにいかないもの、だろうか。

漢詩と和歌とは、かつてこんなに近くにあったのだ。

(小島ゆかり)